

報告タイトル

「ミンダナオ島におけるイスラーム女性の社会進出」
“Women’s empowerment in the Mindanao”

氏名(所属)

丸山 実紗(拓殖大学大学院国際協力学研究科博士後期課程1年)
MARUYAMA Misa (Graduate School, Takushoku University Graduate School)

要旨(800字程度)

フィリピンはアジアで最もジェンダー平等性の高い国であり、世界の「ジェンダーギャップ指数」においてもヨーロッパ諸国と並ぶ高い水準にある。また女性の就学率と専門職に占める割合は世界で最も高く、女性の人権を守るための強力な法的枠組みもある。フィリピン男性はこうした状況に抵抗心はなく、家事や育児を女性の仕事(責任)としない、家庭では父親よりも母親が主導権を握る社会にある。このような家族と女性に対する価値観は、フィリピン内において対立関係にあるキリスト教社会(マジョリティ)とイスラーム社会(マイノリティ)の双方に共通しており、女性の家庭内での地位だけでなく社会進出を支える一つの要素となっている。

本報告ではイスラーム女性の社会進出を支える家族と女性観に焦点を置き、劣悪な環境下においても多くの女性達が力を発揮することが出来る要因について明らかにする。1950-60年代に、カイロ留学生(ミンダナオ・ラナオ地方出身)により発行された雑誌『新しい黎明』は執筆者45名のうち2割が女性である。彼女たちの多くは、「世界の女性は皆母である」という考えの下で改革について述べており、女性を直接的な教育の担い手として重要視している。母親は子どもと接する時間が長く、母親の持つ性格や教育達成度は父親以上に関係性が強い。女性達の持つ子ども観がイスラーム共同体の構築に直接的な影響を及ぼすことが、ここでは主張されている。女性に対して家事などの家庭内での役割を期待するよりも、家族との接触時間を大事にすることが役割として求められているのである。こうした家族の伝統的なあり方が現代においても引き継がれ、イスラーム法と女性性規範の解釈に寛容さを生み出し、行動の自由がもたらされているのである。

フィリピン社会において男女の相互扶助の精神が社会に浸透していることが、ミンダナオ島にいるイスラーム女性達の社会進出を可能にする一つの要因となっている。